

ゲスト◎文楽人形遣い

吉田和生氏

人生の積み重ねが、
人形の情をつくる。

吉田玉女氏

プロフィール

吉田和生（よしだ・かずお）

1947年、愛媛県生まれ。人形細工師・大江巳之助氏の勧めで人形遣いの道へ。1967年文楽協会人形部研究生となり、吉田文雀（現・人間国宝）に入門。現在は女方や二枚目を持ち役に文楽人形遣いの第一人者の一人。因協会奨励賞、大阪文化祭賞、国立劇場文楽賞文楽優秀賞ほか、受賞多数。

—— 文楽の道に進まれたきっかけを教えてください。

和生 まさか自分が文楽をやるとは思っていませんでした。私はもともと職人の世界に憧れていたんですけど、高校を卒業して訪ねた人形細工師さんから「作るよりも人形遣いになってみたら」と勧められて。それがきっかけです。

玉女 私は大阪の出身ですが、近所に人形遣いの方が住んでいて、中学生のときに公演のお手伝いをするようになったんです。それがご縁ですね。

—— 修行時代は相当なご苦労があったと思います。

和生 うーん、よく聞かれますけど、苦労という苦労はないんですよ。それは当たり前やと思っていましたから。ただ、手取り足取りは教えてくれません。うちの師匠が言うのは、「わしはこうやってる」。体つきも個性も人それぞれやから、単純に真似るのではなく、自分で考えながらやってみなさいということでした。

玉女 私の場合はとにかく「舞台を見なさい」と言われましたね。芸は盗むもんやと。あと、ほかの弟子が注意を受けたときは、自分のことだと思っただけと聞かれて、それは守ってききました。

—— 壁にぶつかることはなかったのでしょうか。

玉女 もちろん、若いころは何度もありました。ただ、師匠が私をしつかり見ていてくれて、いいときは「今日は良かったで」ときちっと褒めてくれるんですね。それが励みになり、支えになって、続けてこられたと思います。

和生 下積みには下積みの、今は今なりの悩みがあります。おかげさまで今は大きな役をいただいていますけど、役に自分が負けてないかどうか、いつも悩みますよ。だから壁は今もしょっちゅうです（笑）。



『妹背山婦女庭訓』で橘姫と求女を演じる(2010年2月23日・24日紀尾井小ホール「女流義太夫の新たな世界」より)

人形浄瑠璃文楽

文楽とは物語を語る「太夫」、それを演奏で支える「三味線」、人形を操る「人形遣い」の三業一体で構成される舞台。演目は「忠臣蔵」「義経千本桜」などの時代物、「心中天網島」「曾根崎心中」などの世話物、「五条橋」などの景事に分けられる。

人形遣い

人形遣いは1体の人形を3人で操り、リーダーである「主遣い」が首と右手、「左遣い」が左手、「足遣い」が脚を動かす。「足十年、左十年」と言われ入門後は足遣いから始まり、左遣い、そして長い修行を経て主遣いとなる。

気を配り合わないという舞台は作れない

—— どうすれば人形を遣ってあのような感情豊かな芝居ができるのでしょうか。

和生 長くやっていけばね、技術は身につくんです。でも、感情の部分はそうはいきません。その人形遣いの個性、人生の積み重ね、いろんなものがあつて初めて表現できるものです。ただ、感情というのは込めすぎてもだめなんです。なぜなら舞台ではあくまで人形が主役。人形遣いは、腰から下は人形と同じ動き方をしますが、腰から上は動きを抑えます。そうしないと人形遣いが主役になってしまう。気持ちを含めながらも一歩引くという、その距離感が難しい。

玉女 感情を込めすぎると、人形の動きが硬くなるし、見ているお客さんも疲れるんです。だから例えば人形の視線と自分の視線をあえて外してみるとか、抜く部分が必要ですね。でも、それもほかの人形遣いと息が合っていないとできません。文楽の場合、〈頭〉と言っていますが、「主遣い」が次にどう人形を動かすかを、頭や肩の微妙な動きで「左遣い」と「足遣い」に伝えます。共演している相手の人形遣いに対しては、舞台で皆が気を配り合っていないと、いい舞台は作れません。

—— 文楽は太夫、三味線、人形遣いの三業一体と言われます。その中での人形遣いの役割とは何でしょうか。

和生 わかりやすく言えば太夫と三味線は音の世界を、人形遣いは見る世界を受け持ちます。基本的に文楽は三権分立で互いに口出しをしません(笑)、舞台の進行はあくまで太夫さんが握っています。そこに合わせるのが人形遣いの難しさでもあり、その中でどう表現しきることができるかが面白さでもありますね。

映像では伝わらないものがある

—— 師匠から受け継いだものを、若い世代にどのように伝えていきますか。

玉女 弟子には私が言われたことを言っていますね。とにかく舞台を見なさい、芸を盗みなさいと。私は40年やっていますが、それでもまだまだ。奥は深いです。芸を磨き続ける大切さを伝えなくてはと思います。

和生 文楽は300年以上の歴史があり、これからも続くと思いますが、その中で私が一線で活躍できるのはせいぜい10年、わずかな期間です。でも、だからこそここでレベルを下げられないという思いがあります。いい舞台を作って、それを後輩たちにつなげたい。

ただ、ちよつと今の若い人に苦言を呈するなら、芝居をビデオで覚えようとし過ぎやないかな。動きは確かに覚えられます。でも、もつと大事な感情や感覚は生で見えて、師匠や先輩から直接聞かないと身につけません。

玉女 たしかに私たちの師匠たちの修行時代には、ビデオはおろかカセットテープもなかったわけですから、お稽古は真剣で厳しいものでした。それが逆に良かったんでしょうね。あと、私らが若手のころは、自分の師匠だけでなく、ほかの師匠からも指導や助言をもらいました。いろんな見方を教えてもらえるので、今思えばそれも良かった。私もそうしていきたいと思っています。

好きを見つければ文楽の世界は広がる

—— 文楽の楽しみ方についてアドバイスをいただけますか。また、今回の『浪花女』のような紀尾井ホールの取り組みについてはどうお感じですか。

和生 文楽の人形は身振り手振りの仕方話(※)です。見て理解しやすいから、海外公演でも

多くのお客様に喜んでいただいています。まあ、お芝居なんで、あまり構えず好きなように楽しんでもらえればと思いますね。人形がきれいだなとか、三味線の音色がいいとか、それぞれ好きな何かを見つけてもらえれば、そこからまた世界が広がりますから。

そういう意味では、今回やらせていただいた『浪花女』なんかは敷居をまたぐ、いいきっかけです。紀尾井ホールは面白い企画ができる場所ですから、またぜひ何かやりたいですね。

—— 最後に、今後の抱負についてお聞かせください。

玉女 まずは自分に与えられた役をしっかりこなしていくことですね。見ているお客様に自分の役がどう伝わっているか、それをいつも自問自答しながら精進していこうと思います。

和生 私の師匠や玉女さんの師匠たちが築いてきた昭和・平成の文楽を、私たちがしっかりと引き継いで、後世にきちつと伝えること。やはりそれが一番の思いです。

※仕方話：身振り手振りを交えてする話

浪花女「壺坂靈験記」誕生物語

紀尾井小ホール

主演・佐久間良子(3月23日〜26日)

(明治時代の大阪、料亭沢田屋の一人娘・お千賀は文楽の三味線弾き・団平の芸に打ち込む執念に心を動かされ、彼と夫婦になるが……) 後年、名作浄瑠璃「壺坂靈験記」の作者となるお千賀と団平の夫婦愛を、現代劇と実際の文楽を組み合わせながら描いた作品。本インタビューに登場した吉田和生、吉田玉女両氏も人形遣いとして出演した。